

は、日常の頻度の観点から見直すべきだろう。

【その他の問題の正解率】

問1 53.8% 問2 82.1% 問3 34.6% 問4 76.9%
問7 92.3% 問8 92.3% 問9 99.3%

第2問 B 問2 (資料4)

【答え】4

【正解率】38.5%

他の問題 問1 88.5% 問3 76.9%

【解説】1, 2を選んだ者は少ないが、3にした者が多い。put + 人 + through (to ~) は、「(電話で~に) …をつなぐ」、put + モノ + through で「…を片付けてしまう」の意味で用いられる。少なくとも前者は「受験英語」の範ちゅうに入っているはずである。正解となる4は「(妥協案などを示して) それでは」の意味あい用いられる成句。センターの会話文は「消去法」により解けるものが多いから、出題者としては、文脈上1~3が消えて4を選ばせる予定だったものと考えられる。受験生の語彙レベルはそれほど高くなく、正解率がこれほど低かったものと思われる。なお語彙数がやや増えていることにも注意。

【対策】センター試験の過去問の会話文を3, 4回繰り返しやっておきたい。なお、会話文の弱い生徒は、リスニングで戸惑うことが多い。よって、リスニング対策も兼ねているということをお忘れはならない。

第2問 C

【正解率】問1 91.0% 問2 76.0% 問3 39.7%

【解説】文脈が追加され、「パズル的に解く」のではなく「何が言いたいのか」を考えさせる傾向が強まった。関係代名詞の省略による接触節を用いた「後置修飾」は相変わらずの出題。問3は「仮定法におけるifの省略による倒置形」の問題。もし、*I could have joined the party I had answered the phone yesterday. としてしまうと文と文をつなぐ接続詞がないのだからおかしいのだが、それを無視して解答してしまった生徒は多い。

【対策】語句整序は、「パズル的な解法」ではなく「この文が言いたいことは何か」を常に考えながら解くことだ大切。高校2年生ぐらいから、過去問題100題ぐらいを3回ほど反復すれば効果が高い。

第3問 A

【正解率】問1 78.2% 問2 89.7%

【解説】第3問B, Cは早くから方針が明確であったが、第3問Aは新傾向3年目にしてようやく方針が固まったようである(それに伴って配点も下げられた)。この問題の狙いは、英語特有の「言い換え」を確認することである。特に問2は、パラグラフリーディングの基本となる「1パラ1アイデア (= 1つのパラグラフには1つの考え)」→「同じ語句の繰り返しを避けて言い換える」を徹底させようとするものである。日本語は同一語句の繰り返しでも問題ない場合が多いが、英語ではそれが徹底的に排除される。同一パラグラフ内でも「言い換え」に気がつかない生徒が多いのは、このような文章を書く上での暗黙の了解が分かっていないからだと思われる。本問は、There are so many issues involved. と言い換えになっていることに気がつけば2だと分かる。

【対策】英語を読む際に、「言い換え」を常に意識すること。たとえばwar, fight, battleはそれぞれ意味が異なるが、同一パラグラフ内では同じ意味を表すこともある。

第3問 B

【正解率】[29] 98.7% [30] 87.2% [31] 94.9%

【解説】各パラグラフの要旨を答える問題。パラグラフの全体像を捉えさせる良問。答えは、当然、本文を抽象化したものになっているから消去法が効果的。[29]では、「少数の信頼できる友人がいれば十分だ」という趣旨の内容に対して答えは、Quality is more important than quantity in friendships. となっている。ダミーの選択肢は、「真逆」あるいは「無関係」な分かりやすいものになっている。この傾向は望ましい。残りの問題も同様である。

【対策】普段から、1つのパラグラフを読んだら、必ずその要旨を書くこと。「結局何が言いたいのか」を常に意識して読めば読解力が飛躍的に上がる。

第3問 C

【正解率】[32] 87.2% [33] 61.5% [34] 73.1%

【解説】この問題はここ10数年で様々な問題形式に変化しているように見えるが、尋ねているポイントは一貫している。英文を読む上で必要なポイントは、①抽象的な表現から具体的な表現へ ②butなどによる逆接の確認 ③代名詞, this, so, suchなどの指示詞に注目する、の3点である。なお、扱われているポイントは、2007年は③/③/①、2008年は③+②/①/①、2009年は①/①/①であった。なお、2009年

A 次の問い(問1~10)の [8] ~ [17] に入れるのに最も適当なものを、それぞれ下の①~④のうちから一つずつ選べ。

問5 You've got [12] on your tie. Did you have fried eggs for breakfast?

- ① a few eggs ② an egg ③ some egg ④ some eggs

問6 "How about going to that conveyor-belt sushi bar again?"

"I'm afraid we can't. It closed [13] last month."

- ① down ② in ③ off ④ upon

問10 "You never seem to gain weight! How do you stay so slim?"

"Just lucky, I guess. It [17] in the family."

- ① comes ② goes ③ runs ④ works

(資料3)

問2 Customer: Could we have three tofu burgers, please?

Server: I'm sorry, we've sold out today.

Customer: That's too bad! Your tofu burgers are so delicious that I brought my friends with me so they could try some.

Server: [19] Why not try the lotus root burgers, instead? If you don't like them, you don't have to pay.

- ① Did I owe you one?
- ② For here or to go?
- ③ I'll put you through.
- ④ I'll tell you what.

(資料4)

に扱われていた題材 (fair trade) もなかなか面白いものであった。

【対策】 「オリジナルセンター用問題集」を見ていると、上のポイントが出題されておらず、「なんとなく内容から解けてしまう」ものが多い。とにかく、普段の英文解釈から上記のポイントを頭に置いて読むべきであろう。「形式だけは同じだが内容が伴っていない問題集」よりは、形式の異なる過去問題の方が有効であろう。

第4問 A

【正解率】 問1 79.5% 問2 82.1% 問3 57.7%

【解説】 従来通り、図表を参考に解く問題で、形式に大幅な変更はない。問3の正解率が悪いのは、英文内容を十分に理解していないと解けない問題だからである。また、従来と同様に比較表現の訓練には最適な教材である。

【対策】 図表を苦手とする生徒は意外と多く、特に地理選択でもなく理科系でもない場合にはその傾向が強いようである。やはり、過去問題を十分にやることで「慣れる」ことが一番である。not more than などの特殊な比較表現ではなく、もっと一般的な比較表現を訓練するには過去問が有効である。

第4問 B

【正解率】 問1 88.5% 問2 97.4% 問3 96.2%

【解説】 問診票から必要な情報を取得する問題。あちこちに情報が散らばっているので、それを短時間で見つける訓練。TOEICに最も近い問題だと思われる。なお、従来のセンター試験には見られなかった語彙が散見される (nausea, constipation, diarrhea など)。解答には直接関係ないものの、日常生活に必要な語彙を出題することは有用であろう。

【対策】 これも、短時間で必要な情報を素早く見つけるための訓練が必要であろう。TOEIC 関連の問題集も効果的である。とにかく様々なパターンに慣れておくことが重要である。

第5問

【正解率】 問A 82.3% 問B 62.8% 問C 89.7%

【解説】 真情報と偽情報を識別する問題。読解量が増えたので受験生は大変だったろう。できの悪いBは、本文の The size of the components in each section is small. という記述から明らかなはずなのであるが、受験生は component や section の具体的なイメージが湧かずに間違ったものと思われる。Cは正解率が高い

が、内容的には日常的な動作を英語で表現しようとする試みが見られる。英作文で出題すれば面白そうな素材である。

【対策】 第2問と同様に、日常生活では普通に使われている語彙を意識的に増強するようにしたい。以前名古屋大学の英作文の問題文の中に「机の下にもぐる」というのがあったが、これを get under a desk と書けた生徒がほぼ皆無だったことがある。このような何気ない表現に受験生は弱い。こうした日常的な語彙もできるだけ増やして欲しい。

第6問

【正解率】 問1 88.3% 問2 62.9% 問3 67.9%

問4 57.7% 問5 79.5% 問6 74.4%

問7 62.8%

【解説】 「これぞ長文問題」という問題である。とにかく全体を読んで「何が言いたいのか」をつかみ、その方向性を考えて解けばよい問題である。従来の物語・エッセイが出題されている頃から、センターの長文は「全体のテーマ」をを考えて解く問題であったが、昨年からの傾向が明確になった。昔から、長文読解と言うと、「1つのパラグラフを読んだら問1を解きましょう」とか、「答えは第2パラグラフの第3文にあります」などの、「本来の読み方」に逆行するような問題集や指導が横行していた。よってセンター試験は、第3問の延長として、パラグラフ全体→文全体を捉えさせるための問題として、この第6問をリニューアルしたのである。よって、とにかく全体を読んで、方向性をつかみ、設問は最後に一気に解く、という「正攻法」が大切である。今年の問題は、「英英辞典 (定義語が2000語とあるからロングマン?) を使いなさい」というセンター作成部会が受験生に贈る明確な主張さえつかめれば簡単に解ける問題であった。

【対策】 普段から「ダラダラと全訳する」のではなく、パラグラフ毎に言いたいことをメモすることを習慣にしたい。もちろん、「意味がはっきりしない箇所」は精読も有効であるが、全体を捉える訓練を優先したい。